

カレッジソングの作詞者W. M. ヴォーリズと同志社

佐野 安仁	近江兄弟社学園長
講師紹介【さの・やすと】	

ヴォーリズ先生と同志社

おはようございます。今、ご紹介いただきましたように一九五二年に同志社に入学しました。そのころは、こんな立派な校舎が立ち並ぶ状況ではありませんでした。明徳館もまだ半分という状況でございました。私は同志社を卒業しまして、滋賀県にあります近江兄弟社学園に就職しました。そのころ、同志社カレッジ・ソングの作詞者、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ先生は健在でした。今、ヴォーリズ先生を知っている方はだんだん少なくなってしまうしましたが、ヴォーリズ先生は珍しい方で、教員採用の面接試験のとき、手相を見るのです。手相を見られて、第一回のときには物の見事に、あなたにはご縁がなかったということで落とされてしまった。よく聞いてみますと、その当時の文化学科の同級生の何人かが、受験していたようです。大方、落ちていました。あとで聞いてみますと採用されて早稲田からきた方が、滋賀県の田んぼばかりの中の校舎を見て寂しくなったのか、兄弟社にくるのは断念されたようです。そこで急遽、哲学科の高田先生が私のところに電報を打ってくださり「すぐ兄弟社にいつでも一度面接してもらいなさい」と。三月末ギリギリ面接もそこそこに、教科書をボンと積んで、現代社会・日本史と世界史をやってくれと。私は哲学専攻で歴史のことは詳しくなかったのですが、覚悟を決めて兄弟社で働こうということで、一年間はノートをつくるのにしんどいことでした。

当時、ヴォーリズ先生のことを十分知って兄弟社に就職したわけではありませんでした。兄弟社に就職してから近江兄弟社がどういう組織なのか、ヴォーリズさんがどういう方であるか、徐々にわかってきたのですが。ただヴォーリズさんがアーモスト館、啓明館の設計者であり、カレッジ・ソングの作詞者であることは聞いておりましたので、そういう点で同志社とヴォーリズ先生はご関係があるのだと、その程度のことしか理解しておりませんでした。最近の同志社の学生は、そのこともあまりご存じないですね。最近、兄弟社で新しい先生の採用試験を行いました。同志社からも何人が受験していただいたのですが、「同志社と兄弟社は関係があるということをご存じですか」と聞くと、ほとんど知らないですね。カレッジ・ソングの作詞者が誰かもあまり知らないようです。最近の建築ブームで、ヴォーリズさんが大阪の大丸、京都の東華菜館、関西学院、神戸女学院、同志社のアーモスト館などの設計者として知られるようになりましたが、本当のヴォーリズ先生の姿が何なのかということはあまりご存じないようであります。

今日はヴォーリズ先生が作詩をいたしましたカレッジ・ソングについて、私を感じ取ったことを申しあげてみたいと思います。

カレッジ・ソングは、ある意味ではその学校の創立者の思い、建学の精神を歌っています。カレッジ・ソングのなかに、まさに同志社スピリットが込められていると思います。しかし建学の精神といえますと、いつも新島襄先生の思想から説き起こしていくことになるかと思います。また新島先生の薫陶を受けた卒業生の方々を語ることによって、同志社の教育はどういうものなのか、同志社はどういった人材を育成しようとしていたのかが語られます。ですから校歌から学ぶということはあまりないのです。一九五二年に入学したとき、体育会系の人が、オリエンテーションウィークに校歌の指導をしました。文化学科でしたが、哲学専攻に入学したのは八人でした。文化学科だけで百人もいませんでした。中に意地の悪い人がいて、指導してくれる体育会の人に「申し訳ありませんが、英語の意味を教えてください」と頼みますと、「何でもいんだ、とにかく英語を覚えて歌いなさい」と言われました。意味を真剣に考えて歌ったではありません。日本語の場合はスッとわかることもあります。英語はとにかく字面を読んで歌っているという状況でした。

最近、東京大学から桜美林大学に移った寺崎昌男先生、日本教育史の先生ですが、その先生が自校教育を提唱しています。自分の入学した学校がどのような歴史をもって、どのような学校であるか、その学校がどのようなことを目指しているかを知らずして、また、自分が立っている土台が何であるかを知らずして、その学校で生活することはある意味では寂しいことではないか。浮き草のように何のつなぎもなく、たまたま入学してきて、スートと卒業していく状況で大学生活を送るのは、寂しいことではないかと訴えています。入学してきたこの学校に、どういった歴史があり、その歴史のなかにどういった起伏があっただろう。栄光の日もあり、挫折の日もあったのかもしれない。しかしそういう起伏を繰り返しながら今日に至ったこの学校の歴史、その学校を、創立者がどのような思いで興したのか。そのことを知って、大学生活を送ることが大切ではないか。そのような気持ちがないと本当に学校で学ぶということにはならないのではないかと、とりわけ私学は建学の精神に惚れ込んで、この学校の精神に生きるのだという志が必要だと思います。そういう意味で「One Purpose同志社」、これはまさに志を同じくする者の集まりだということをおおらかに歌っているように思います。

カレッジ・ソングの背景

今日はカレッジ・ソングについて、私の知る限りのことをご紹介しますと思います。一八七五年（明治八年）十一月二十九日、同志社の創立記念日、同志社英学校が開設された日です。それから一九〇九年（明治四十二年）まで、およそ開校から二十年間、同志社には校歌がなかったのではないかと思います。それまでは讃美歌を皆さんで一緒に歌っていたと思います。式典のとき、讃美歌でも十分、同志社の精神は伝わると思いますが、校歌がなかったようであります。最初に歌われたのが一九一二年（明治四十五年）、同志社大学が開設されたときです。英学校から新島先生の並々ならぬ努力によって大学が開設され、開校式が行われたときの式典の終わりに皆さんでカレッジ・ソングを斉唱した、という記事が同志社の学園史に掲載されています。以降、この歌が歌われるようになります。

カレッジ・ソングは、どういった経緯で成り立ったか。皆さん、すでにご存じだと思いますが、カレッジ・ソングは、シドニー・Ｌ・ギューリックという宣教師とウィリアム・メレル・ヴォーリズさんの二人の外国人によって作られたのです。詩はヴォーリズ先生ですが、曲はヨーロッパの民謡が採用されて歌われています。『カザブランカ』という映画がありまして、そのなかで軍人たちが行進しながら歌っている曲が同志社のカレッジ・ソングの曲と同じでした。繰り返しますが、曲はヴォーリズさんではありません。作詩がヴォーリズさんです。

ギューリックさんとヴォーリズさんは、どういったつながりがあったのでしょうか。実はギューリック先生は一八八八年（明治二十二年）に來日、一九〇六年（明治三十九年）に同志社に移りまして、同志社で科学概論、進化論を講義して一九一三年にお帰りになりました。帰国後も、ギューリック先生は日本の平和についてご関心のあった先生の方です。特に排日法案が翻転したときには日米関係のなかで日本のためにいろんな努力をなさった先生だと、いろいろなところに記載されております。今泉先生（同志社の神学部の先生）とギューリック先生は翻訳の仕事をされています。

一方、ヴォーリズさんは一九〇五年（明治三十八年）に來日しております。ヴォーリズさんは滋賀県立商業学校の英語教師として就職します。公立の学校でバイブルクラスを開きまして、生徒に聖書を教えたことが学校の方針に合わなかったのだらうと思います。近江八幡というところは仏教の強いところでしたので、周囲の人たちの批判もありまして解雇されてしまいました。日本にきてわずか二年、解雇されてどうしようかと迷ったのですが、日本に伝道するためにきたということで留まったわけであります。生活が大変でした。ヴォーリズさんは伝道活動に献身したのですが、神学者として、伝道者としての専門的な教育は受けていなかった。大学では建築学、設計の勉強をしており、とりわけキリスト教についての専門的な勉強をしたわけではありませんでした。彼は、平信徒として伝道に献身したのです。

ところが解雇されたとき、バイブルクラスの吉田悦蔵と村田幸一郎、数名の方が、先生、何とか一緒に勉強を続けましょうということで、近江八幡に小さい建物、YMCA会館をつくり、そこを拠点にして何とか米と塩だけでも頑張ろう、とまさにギリギリの生活のなかで伝道活動をいたしました。ところがちょうどそのころ、京都の三条にYMCA会館の建設が進められていました。

この会館は、ドイツ人のデルランの設計でした。アメリカのワナメーカー氏の高額の寄付によって建設されたものです。今もあります。ヴォーリズさんは、その会館の建築の監督を依頼されて京都にきていたのだそうです。京都におりながら、同時に監督だけでなく同志社に出入りしたり、英語を教えて生活をしたということでもあります。ヴォーリズさんは、同志社のギューリック先生とお会いする機会があり、ギューリック先生から「カレッジ・ソングを作詩してくれないか」と依頼されたようです。ヴォーリズさんは、快く引き受けてカレッジ・ソングの作詩をしたのであります。作詩ということに全く経験のない人だったら、ハイと引き受けることはなかっただらうと思いますが、実はヴォーリズさんはその前、一九〇八年、「平和」と題する讃美歌を作詩しています。この讃美歌は別所梅之助さんの翻訳で、日本の讃美歌のなかに載っております。『讃美歌』（一九五四年版）二三六番、平和という題で作詩したものであります。これはアメリカでも話題を呼びましたし、日本でも讃美歌のなかに採り入れられております。作詩の素養があることをギューリック先生はご存じのようでした。ヴォーリズさんの詩才をご存じのうえで、ぜひカレッジ・ソングの作詩をしてほしいということをお願いしたようでもあります。

ヴォーリズさんは、なぜ平和について関心をもち、平和についての作詩をしていたのか。それは実はヴォーリズさんが、日本にきて伝道をしようと決断するに至ったことに関係しています。そもその契機は一九〇二年、カナダのトロントでYMCAの学生たちの学生伝道隊の大会が開催されました。そのときに中国伝道に派遣されて帰国した婦人伝道師のハーワード・テラーさんが、カナダのトロントのマッセイという講堂で帰国報告をいたしました。その講演の内容は、義和団事件による、中国山東省での反キリスト教暴動について、でありました。テラーさんはそのとき、「中国では今から二年前、義和団事件が起こりました。これは中国山東省の反キリスト教の暴動であって、その暴動が華北一帯に広がって、反帝國主義の運動に展開していった。そもそそれを起こした人たちは水害や日照りに苦しむ山東省の農民、手工業の人たちで、その人たちが義和団という秘密結社をつくって、中国から外国勢力を根絶しようとしたのです。その動きが教会を襲撃し、キリスト教信者を迫害し、惨殺したのです。中国にいた宣教師たち、信者たちは、神への忠誠を貫くために殉教の死を遂げた。折りながら死んでいった信徒の姿は、実に気高いものでした」と報告したのです。

「皆さん、外国伝道で犠牲になった人たちの精神を何とか継承しようではないか」と訴えたのです。ヴォーリズさんはそのとき、じっと自分にテラーさんの視線が集まっているように感じたのと、『失敗者の自叙伝』のなかで自分の気持ちを書いています。ヴォーリズさんはそのとき、まだ決断しませんでした。一九〇五年に決断して、日本にまいります。外国伝道を志す契機は、幼少期に、お母さんが熱心な信者であって、「この子はキリスト教伝道のために広く伝道者として献身してほしい」という願いをもっていただようであります。そういう母親の願いも重なったのかもしれませんが。トロントでの集まりに、関西学院大学の第四代院長のベーツさんもその場所にいたようです。ベーツさんは神学の勉強を専門になされた方で、すぐ日本に來ます。そして開学で働くわけですが、やがてベーツさんとヴォーリズさんは、カナダ時代の知り合いということもあって、西宮市上ケ原の開学のすばらしい建物を設計することになります。

一九〇五年というのは日本では日露戦争のときでした。義和団事件以来、その争いが尾を引いていた結果、日露戦争が起きました。ヴォーリズさんが日本にきたとき、日露戦争の影響が色濃く残っていました。そういう情勢のなかで、ヴォーリズは敏感に、アジア地域の混乱した状況に対して何とか福音による平和を願っていたようであります。折しも、外字新聞が手に入りまして、ヨーロッパでも軍需拡張の流れがあって、これはただごとでない、世の中の流れは何となく平和の方向ではなく戦時拡張の方向に進んでおり、世界が対立、紛争の方向に流れているのではないかとこの心配をなさったようであります。そのことに強い警戒心をもち、とにかく平和を願う気持ちから一九〇八年に「平和」と題する作詩をいたしました。

『讃美歌』二三六番とカレッジ・ソング

その一九〇八年の平和という詩と一九〇九年のカレッジ・ソングは非常に中身が似ています。『讃美歌』二三六番の英語の詩を見ますと、第一節は、神の光と英知によって、この世の人間に本当の「人間らしさ」と「愛」を与えてください。人間を神の御旨にかなう行為者にしてください。行為者になろうという祈りです。

第二節では、私たちの乱れた心、思い高ぶった心に生ずる争いや抑圧的な行いを終わらせて、私たちを神の真理を伝える使者にしてください。そういう使者になろうではありませんかという祈りです。特に人間の心に潜む呪い、殺意、貪欲を浄化して清めてくださいという祈りです。

第三節は『讃美歌』（一九五四年版）二三六番がカレッジ・ソングにもつながっているようですが、乱れた世に「平和」への理想、ヴィジョンを与えてください。そしてすべての人が「善」と「幸福」を共にし、苦楽を共にして、互いに助け合う「愛」を与えてください。特に生活上のすべての脅威であるとか、恐れを取り除く「愛」を与えてくださいという祈りであります。

第四節は、悩み、苦しみ、争いを終わらせてください。また神の御旨にかなう働きで愛と笑顔に満ちた家庭（世界）を築くようにしてください。そして迷いのなかにある人びとたちに本当の平和を与えてくださいという祈りです。こういう祈りが『讃美歌』二三六番であります。

この歌は残念ながら、『讃美歌二』では削除されて、ありません。一九五四年の『讃美歌』には載っていると思います。世界の動向を気づかって戦争をなくそうと願ったヴォーリズの平和への思念が、一九〇九年のカレッジ・ソングに、どうも引き継がれているように思います。

標題の「一つの目的」ですが、心と同じくする者が、一つの目的に立ち向かって生きようではないか。神につながる一人ひとりが神の教えにしたがって、協働しようではないか。そういうことであったかと思えます。

第一節。一つの目的、同志社、その名は崇高な志を意味する。神のため、祖国のため、心と身体を鍛えて葡萄の幹、神につながる枝として働きましょう。世界に向かって広く、巡り行こうとも、神の教えは私たちの心の中にずっと生き続けているのですから、本当に幹につながる葡萄の枝として皆、働きましょうという訴えであろうかと思えます。ここに同志社人の志が、まず設定されているように思います。

第二節では、私たちは何のために同志社にきたのかと。それは広い文化を求めるためだ。また真の目的の価値を新しく学ぶために同志社にきて留まっているのだ。そしてしっかりと心の節操を持ち、未来に処するのだと訴えています。同志社は未来に向けて高き理想をめざし、神のため、母校のため、祖国のために役立てよと教えているのです、と歌っています。何のために同志社にきたか。皆さんは、あまり考えていないのかもしれませんが。本当に同志社の設立の旨意を考えて、それに賛同して入学したという人は少ないのではないかと思います。偏差値とか、授業料の問題とか、就職のことを考えて、入学した人は多いでしょう。そうではなく同志社のすばらしさを感じていらっしゃる方もいると思いますが、建学の精神を理解して、入学した人はだんだん少なくなってきた。カレッジ・ソングは、同志社にきて、ここになんで留まっているのか、それは本当の目的の価値をしっかりと学んで、わが同志社は未来に向け、高き理想を目指し、神のため、母校のため祖国のために役立てよ、と歌っているのです。これから進む未来に処する姿勢を、ここでお互いに築こうではないかと歌っているのです。我が同志社は未来に向け、高き理想を目指し、神のため、母校のため祖国のために役立てよと歌っているのです。

第三節は『讃美歌』二三六と重なっていますが、戦雲、空を暗くして、陰悪な状況を示すときに、幾万の愛国者が武器を取ろうとも、私たちは永遠の平和を願い、平和であることに祖国の名と名声を高めていこうではないか。武器を取って武力によって国力を強くしていくことを誇りとするのではなく、永遠の平和を願って平和であることに祖国の名声を強めようと。私たちは生涯を神にゆだね、その理想のために捧げようと。

第四節はまさに現代にも生きていることと思えますが、生まれた国土を広く超えて、私たちは世界が一つであることを学んだのです。世界が一つであることを同志社で学んだのだ。だから自愛よりも人類への愛と奉仕の気高さに気づいたのだ。だから私たちは神につながる同志社の子として聖なる人生を懸命に生き、神と同志社と兄弟（人類）のために新しい歴史を築いていこう。同志社は、平和のためにいろんな問題があっても現実の社会のなかで本当に平和を目指して、将来に新しい歴史を築き、そこに向かって進んでいこう、ということが、ヴォーリズさんの願いであったように思います。

新島先生の思いをヴォーリズさんはそれなりに理解して、このようなカレッジ・ソングを作成したのでしょう。カレッジ・ソングを、私たちはいろいろな集会で歌います。私たちの心は同じ志をもって、混乱した時代に永遠の平和を願って未来に処していこう、新しい平和な歴史を築いていこうと皆で歌っているのです。そういう思いで一つになるとき、まさに同志社の教育が、今も生きているということになるのではないかと思います。葡萄の枝として、協力しましょう、本当の価値を学び、永遠の平和を歌い、世界が一つであることを学んで人類への愛と奉仕に生きましょう、ということで結んでいる同志社のカレッジ・ソングは、まさに心をつなげて平和を歌っている歌であると思えます。

カレッジ・ソングと平和への願い

ヴォーリズさんは、一九三四年（昭和九年）、「同志社校友同窓会報」で「近江兄弟社の精神的機構」について講演しています。その中でヴォーリズさんは、「近江兄弟社は世界的兄弟主義であります。その目的は神の栄をあらはすことです」と説明しています。また「その目的のために全世界が協働することが必要です」と主張しています。兄弟社は西洋の人・中国の人・韓国の人・日本人が働いています。「其れらの人々と共に働くから支那のことを考える、朝鮮のことも考えることができるのです。神の国の主義は全世界の兄弟主義であります。真理は球のようなものであります。一方からは各々其の半分しか見えないので双方から見たものを一つにせねばなりません。西洋、東洋の合併、其れが私どもの主義であります」。こう述べております。これはまさに「世界は一つ」という、カレッジ・ソングのなかで歌っている思念であり、常に兄弟社の思いであり、ヴォーリズさんの思いであったように思います。

ヴォーリズさんが近江八幡にきて、仏教の強いところで生活を始めたわけですが、そのときにヴォーリズさんが一番心掛けたことはどういうことか。それは、異なった文化、習慣によってきた理由、その理由を探究することでした。自分の考えから、良いとか、悪いとか判断して、これは間違っていると決めつけてはいけません。それぞれの生活にはそれぞれの生活が生み出した一つの知恵があり、生み出した一つのしきたりがある。それがどう理由でつくられてきたかということ、十分に探究することだと指摘しています。それを知ることが、そこに生活する人たちの人間理解、人びとの思いを理解することにつながっていくのだ、ということを訴えています。ヴォーリズさんはキリスト教の伝道にきたのですが、キリスト教を押しつけることはしませんでした。これは新島先生とも共通しています。しかし粘り強く、真摯に、真面目に話をしながら、その人たちが自発的に「じゃ、一緒に働きましょう」となるまで粘り強く頑張ったということでもあります。「其の国の文化がよって来る理由」を求め、そうすることによって、自分の思いと突き合わせようとしたのです。異国文化、国際関係に敏感な人でした。そして彼は、人間関係・国際関係において常に兄弟主義、「平和」であることへの思念を忘れることなく、伝道地で頑張ったのです。その思いは同志社にもあり、カレッジ・ソングのなかにも生きているのではないかとこの気がいたします。

こうした「平和」への思いは、新島先生にもあったように思います。『新島全集』を見て、新島先生の平和に対するまとまった見解を私は探し出せませんでした。先生がお書きになっているいろんな文章のなかに、さまざまな形で平和への思念が表出されております。明治十七年、「明治専門学校設立旨趣」。そのなかには「泰西の道徳を基本として人文の自由を発育するは、之を警ふるに猶磐石に立ちたる城壁のごとく、剣刃以て当たるべからず、猛風以て破るべからず、激浪以て覆すべからず」と指摘しています。まさに文化、学問の自由、それは国家権力によっては抑制すべきものではないと。こういう意味では、まさにその根底に平和の考え方があったのではないかとこの気がいたします。

明治十五年の「地方教育論」のなかにも「自由民権の養成所は、此のコレジにあり、此の義塾の挙なくんば如何にして国の勢力を養うべきぞ、海陸軍を増す弥末の浅論なり」。陸海軍の力を増強することによって国力を高めていくという考え方は、たいした考え方ではないのだと言っています。国を良くしていくためには自由民権の思想をしっかりと教育することであり、軍事力によるのではないということです。

明治十三年の「文明の基」では「日本の国富ます兵の強からざるを憂勿れ」。軍力が弱いことを憂いてはいけませんといっています。「平民主義」では「平民主義は戦争を他国に仕掛けず、他を奪掠せず」。新島先生の思想のなかにも武力によるのではなく神の愛による平和の思念が随所にあるように思います。

新島の「自由自治」の思想は、「平和」への思念なくしては成り立ちません。ヴォーリズ先生の訴えたことは新島先生の訴えたことにも通じているように思います。そういう意味で同志社のカレッジ・ソングは、常に平和への願いを込めて平和を歌っているように思います。同志社の良心教育、同志社スピリットの神髄も、まさに神の愛による平和の実現にあります。校歌を歌うときに、私たちは平和の願いを心に秘めて高らかに歌い、平和を願うカレッジ・ソングをいつまでも歌い続けることが、同志社にとって大切な使命ではないかと思えます。

以上をもって、カレッジ・ソングについての私の考え方を述べさせていただきました。ありがとうございました。

二〇〇七年十一月七日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録